

本書の特長と利用法

■本書の特長

本書は、駿台予備学校の古文科講師と漢文科講師が共同で練り上げたオリジナル問題を、古文十四題・漢文七題収録した、読解および記述トレーニング用の問題集です。

各問題の冒頭には、難易度の目安（★★★基礎レベル・★★★標準レベル・★★やや難）および標準解答時間・配点を表示しました。さらに〈記述解答用紙〉を使用することにより、実戦的な練習ができるようになります。

別冊の〈解答・解説編〉には、解答・解説にプラスして、各設問ごとの配点・採点基準も加え、自分で答案を採点することができます。

ここに収められた古文十四題・漢文七題と真摯に取り組むことで、大学入試を突破するために必要な、読解力と記述表現力を養い、志望校合格を果たされることを願ってやみません。

■本書の構成

〈古文・問題編〉〈漢文・問題編〉〈記述解答用紙〉〈解答・解説編〉の4冊子に分かれています。

■効果的な利用法

① まず、〈問題編〉の各回の最初に示した〈標準解答時間〉内で、

ひととおり問題を解いてください。

——これは〈速く解く〉ための練習です。

② 次に、同じ問題について、時間を気にせず、もう一度じっくり読んでください。本文の理解が深まったところで、記述解答についても、よりよい解答にできないかどうか、考え方直してみましょう。

——これは〈きちんとと考えて解く〉ための練習です。①と②とをくりかえすうちに、二つの力が結びつき、〈速く、きちんとと考えて解く〉ことができるようになります。

③ 最後に、〈解答・解説編〉を見て、〈解答・採点基準・解説〉を参考に、自分の答案を採点・添削してみましょう。

——これは、自分の答案の欠点を自分で見つけ、修正する練習です。この練習をくりかえし、〈自分の答案を添削する力〉をつけてゆくことが、つまりは記述表現力を高めることなのです。よりよい答案を書く力とは、試験時間中に自分の答案を添削できる力なのですから。

④ 知識を問う設問で誤ったものについては、その日のうちに復習し、覚えておくようにしましょう。読解を求める設問については、しばらく日をおいて（解答・解説の内容を忘れかけたころに）もう一度同じ手順でやり直してみるのも効果的です。

古文編目次

〈出典〉

〔〕は解説冊子の頁

第1回	昔、菅原孝標といふ人の隣に	「しみのすみか物語」	4
第2回	さて、年ごろ思へば	「蜻蛉日記」	8
第3回	鎌倉武士、入道して高野の蓮花谷に	「今物語」	12
第4回	四条大納言、寛弘二年のころ	「十訓抄」	16
第5回	この栗田殿の御男君達ぞ	「大鏡」	20
第6回	雅房大納言は、才かしこく	「徒然草」	24
第7回	覚日坊の律師申されけるは	「義経記」	28
第8回	今は昔、男二人して	「平中物語」	32
第9回	むかし、男ありけり。	「伊勢物語」	34
第10回	わざもこが来べき宵なり	「俊頼脳」	36
第11回	恵心僧都は、修学の外他事なく	「沙石集」	40
第12回	「五節の局をみなこぼちすかして	「枕草子」	44
第13回	夢にも知りたまはぬことなれば	「源氏物語」	48
第14回	去年の秋、かりそめに面をあはせ	「許六離別の詞」	52

第1回

『しみのすみか物語』

20分・30点
解説 4ページ

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔、すがはうづたかすゑ菅原孝標すがはうづたかすゑといふ人の隣に、下衆男げす^aのありけるが、娘一人持たり。この娘、常に孝標が家に行き通ひて、馴れ親しみけり。

ある日、母に言ひけるは、「隣の御方こそ、ものがたりぶみ物語文好ませ給ひて、世にありとあるもの、おほかた持たせ給はぬはなし。さばかりならずとも、我も、一卷二卷は欲しくはべり。Aいかで、『伊勢物語』『大和物語』、この二卷、求め出でて、我に賜びてむ」と言へば、母、「ふびんなることをも言ふかな。隣こそ、前の常陸介さきひたちのすけにておはせ。御娘ときこゆる人も、さやうの文など、見集め給ふこと、さもあるべし。今日だに暮らしわぶる下衆の家にて、文など取り扱はむは、にげなく、人笑へなることぞ。さる暇いとま^eあらば、裁たたち縫ぬひのかたに、心入れてひねり習へかし」と、いとすさまじと思ひて言ひければ、父、聞きて、「伊勢・大和物語を欲し」と言ふとか。そは、言ふままに求めてやり給ひね。かれ、男をのこにしもあらば、今日このごろは、さる国々行めぐき巡りて、寺社のかぎり巡礼めぐらしもありきて、ここらの錢つかをこそ遣はめ」と言ひけり。②

伊勢・大和の名所を挙げたる文とや思ひたりけむ、いとをかし。

(注) ○隣の御方——隣の姫君。

○我に賜びてむ——私にください。

(石川雅望『しみのすみか物語』)

○ひねり習へかし——努力して練習しなさいよ。
○すさまじ——とんでもない。

問1 二重傍線部 a 「あり」・d 「きこゆる」・e 「暮らしあぶる」の動詞の、基本形（終止形）、活用の行と種類を、それぞれ答えよ。

問2 二重傍線部 c 「欲しく」・f 「人笑へなる」の基本形（終止形）、品詞名、活用の種類を、それぞれ答えよ。

問3 二重傍線部 b 「ぬ」・g 「ね」の助動詞の、基本形（終止形）、ここでの文法的意味（職能）、活用形を、それぞれ答えよ。

問4 波線部 A～C の現代語訳として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、符号で答えよ。

A 何と

イ なんとかして

ウ どうして

エ 何でもよいので

オ どのような手段で

B ふびんなること

イ 面白いこと

ウ 悲しいこと

エ 意味のないこと

オ 不都合なこと

C 「さもあるべし」

ア たやすいことかもしない
イ 困難なことに違いない
ウ 好ましいことかもしない
エ 当然のこととに違いない
オ よいことかもしれない

問 5 傍線部① 「寺社のかぎり巡礼しありきて、こ_こらの錢をこそ遣はめ」 を現代語訳せよ。ただし、「巡礼」は「巡礼」のままでよい。

問 6 傍線部② 「いとをかし」とあるが、筆者はどのようなことに対して「をかし」と感じたのか。わかりやすく説明せよ。

古文編1

『しみのすみか物語』

得点

点

問1

e	d	a	基本形
行	行	行	活用の行と種類

問2

f	c	基本形
品詞名	活用の種類	

問3

g	b	基本形
		文法的意味

問4

A
B
C

問
5

問
6

--	--

Sample

古文編1 『しみのすみか物語』

解答

- 問1 a あり・ラ行変格活用
d きこゆ・ヤ行下二段活用
e 暮らしわぶ・バ行上二段活用
f 欲し・形容詞・シク活用
g 人笑へなり・形容動詞・ナリ活用
- 問2 c 欲し・形容詞・シク活用
d きこゆ・ヤ行下二段活用
e 暮らしわぶ・バ行上二段活用
f 人笑へなり・形容動詞・ナリ活用
- 問3 b ず・打消・連体形
g ぬ・完了・命令形
- 問4 A イ B オ C エ
- 問5 すべての寺や神社を巡礼して回って、たくさんの金を使うだろう。
- 問6 父親が、娘の欲しがった『伊勢物語』『大和物語』について、これを物語であるとは知らず、伊勢や大和の名所案内だと思つていたこと。

問5 〈5点〉

◇以下の要素が書けていなければ、各マイナス2点。一ヵ所間違いで3点。二ヵ所間違いで1点。

▼「寺社のかぎり」が、「すべての寺や神社」と訳せていること。

▼「ここら」が「たくさん」の意味で取れ正在こと。

▼「錢をこそ遣はめ」が「金を使うだろう」と訳せていること。

◇文末に句点を欠くもの、1点減点。

問6 〈5点〉

◇『伊勢物語』『大和物語』のことを、物語ではなくて、伊勢や大和の名所案内だと思っていた、という内容が書けていれば5点。この内容が書けていなければ0点。

◇文末が「こと」で終わっていないもの、1点減点。

◇文末に句点を欠くもの、1点減点。

配点・採点基準

(30点)

問1 〈各2点〉
問2 〈各2点〉

◇各枝問とも、求められているすべての項目がそろつて正しくて2点。

問3 〈各2点〉

◇gは「完了」が「確述」「強意」となつていても可。

問4 〈各2点〉

出典

『しみのすみか物語』〈上 菅原孝標の隣なるげす女の事〉。

『しみのすみか物語』は、江戸時代の狂歌師・戯作者・国学者である石川雅望の著した笑話集。一巻五十四話から成る。鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』の文体・体裁を模倣する。

解説**問1 〈動詞の活用についての問題〉**

用言の活用は、古典文法の土台となる重要な知識である。

a 「あり」・「をり」・「侍り」・「いまそかり」は、ラ行変格活用の動詞。

ラ行変格活用は次のように活用する（代表例として、「あり」の活用を示す）。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
あ	ら	り	り	る	れ	れ
聞こ	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ

d 「聞こゆ」はヤ行下二段活用の動詞。「聞こゆ」は、次のように活用する。

「聞こゆ」は、ヤ行の動詞であるから、その仮名遣いには特に注意しなければならない。ア行・ヤ行・ワ行に属する語は、その行の認定が紛らわしい。次にあげる動詞は、できれば覚えておいた方がよい。

活用の種類		属する動詞
ア行下二段活用		
ヤ行上一段活用	「得」 〔得う〕	〔複合動詞〕
ヤ行上二段活用	「射る」 〔射い〕	〔心得〕
ヤ行下二段活用	「老ゆ」 〔老お〕	〔所得〕
ワ行上一段活用	「覺ゆ」 〔覺る〕	「悔ゆ」 〔悔く〕
ワ行上一段活用	「居る」 〔居る〕	「率る」 〔率る〕

ワ行下二段活用

「植う」「飢う」「据う」

e 「暮らしづぶ」はバ行上二段活用の動詞。本来は「暮らす」・「わぶ」の二語からなるが、「暮らしづぶ」のように結合した場合、複合動詞として一語で扱う。

問2 〈形容詞・形容動詞についての問題〉

用言の活用については、動詞については何とかこなせても、形容詞・形容動詞となると、分からなくなってしまう人が多い。まず、形容詞・形容動詞であるということが分からなかつた人は、活用表をよく覚えて、見つけ出せるようにして欲しい。

f 「欲し」はシク活用の形容詞。「欲し」は次のように活用する。なお、未然形の「(しく)」に()が付いているのは、未然形の「しく」があるという意見とないという意見が共にあり、どちらとも決められないからである。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
欲	(しく)	しく	し	しき	しけれ	しかれ
	しから					
	しかり					

g 「人笑へなり」はナリ活用の形容動詞。「人笑へなり」は次のように活用する。

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
人笑へ	なら	に	なり	なる	なれ	なれ
	なり					
	なり					
	なる					
	なれ					
	なれ					

問3 〈助動詞の意味と基本形(終止形)を答える問題〉

文中の助動詞を特定できなければ、読解も現代語訳も正確に行えない

ことがある。各助動詞の活用・接続については確実に覚えておきたい。

b 「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形。g 「ね」は、完了の助動詞「ぬ」の命令形（「ぬ」の命令形については、「完了」ではなく、「確述」「強意」とする意見もある）。次に打消の助動詞「ず」と、完了の助動詞「ぬ」の活用表を掲げる。

種類	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
打消	す	(す)	す	す	ぬ	ね		
完了	ぬ	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	○	
	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね		
							特殊型	
							ナ変型	

打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」、已然形「ね」は、それぞれ完了の助動詞「ぬ」の終止形「ぬ」、命令形「ね」と混同しないように注意しなければならない。両者の接続の違い（「ず」は未然形接続、「ぬ」は連用形接続）から判別するのが原則である。b 「給はぬ」の「給は」は、ハ行四段活用動詞「給ふ」の未然形であることから、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形であると判断される。g 「給ひね」の「給ひ」は、同じくハ行四段活用動詞「給ふ」の連用形であることから、「ね」は完了の助動詞「ぬ」の命令形であると判断される。

問4 〈古文單語〉

「いかで」・「ふびんなり」・「さもあり」は、いずれも重要單語である。

重要單語が出てきたら、その意味を覚えておくとよい。

A 「いかで」は、文末にくる語によって意味が変わる。「いかで…ダロウ」のかたちのときは、全体で疑問・反語となる。この場合、「いかで」は「どうして」と訳す。対して、「いかで…タイ・テホシイ・クダサイ」のかたちのときは、全体で意志・願望（ないしは命令）となる。この場合、「いかで」は「なんとかして」と訳す。Aは下に「我に賜びてむ」とあるように、下に「私にください」という意味の言葉がきているので、意志・願望となる。

B 「ふびんなり」は、漢字で表記すると「不便なり」となる。条件が整わなくて不便・不當に感じる様子を表し、「都合が悪い」と訳す。これは「困ったこと」と訳すと文意が通りやすいが、「困ったこと」で出題するのは難しいと判断して、敢えて原義のままの「不都合なこと」を正解とした。

C 「さもあるべし」は、連語「さもあり」に推量の助動詞「べし」が接続したもの。「さもあり」は、「いかにもそのとおりだ」「もつともだ」の意。「べし」は推量で用いられているとき、「…に違いない」と訳す。

問5 〈現代語訳〉

「かぎり」・「こら」・「め」の訳がポイントとなる。「かぎり」は、漢字で書くと「限り」となる。時間・空間・程度について、その限界を表す。ここのように「のかぎり」とあるときは、「あるだけ全部」「すべて」の意で用いられることが多い。ここでの「寺社のかぎり」も、「すべての寺や神社」と訳せばよい。「こら」は数量が多いことを表し、「たくさん」と訳す。「ここだ」「そこら」「そこだ」「そこばく」でも意味は同じ。「め」は、推量の助動詞「む」の已然形。係助詞「こそ」の結びとなっているので、已然形になっている。助動詞「む」の活用形は次の通り。

種類	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用型
推量	む	○	○	む	む	め	○	
								四段型

「む」には、推量の他に、意志・婉曲などの意味があるが、ここは最も基本的な用法である「推量」。「…だろう」と訳せばよい。

問6 〈説明問題〉

この問題が分からないと、この話の滑稽味が理解できない。ここでの「をかし」は、「趣がある」というような意味ではなく、現代語と同じような「おもしろい」という意味となる。ポイントは、やはり傍線部の直前の「伊勢・大和の名所を挙げたる文とや思ひたりけむ」である。娘が欲しいと言ったのは、『伊勢物語』『大和物語』である。これらは、平安時

代の代表的な歌物語である。ところが、父親はそのような常識を知らずに、これを「伊勢・大和の名所を挙げたる文」と考え、男ならば実際に伊勢・大和へ旅行に行つて金を使うのに、女だから名所案内の本だけで我慢しようと言つているのだから、大目に見てやれと、勘違いして言つているのである。この勘違いの内容をまとめれば、ここの解答となる。

現代語訳

昔、菅原孝標という人の隣に、身分の低い男が住んでいたが、（その人が娘を一人持っていた。この娘は、いつも孝標の家に通つて行き、（孝標の娘に）慣れ親しんでいた。

ある日、母に言つたことには、「隣のお姫様は、物語の本をお好みになつて、世の中にある全ての本で、まったく持つていらつしやらないものはない。それほどでなくとも、私も、一、二冊は欲しいと思うのです。何とかして、『伊勢物語』『大和物語』、この二巻を、探し出して、私にください」と言うので、母は、「不都合なこと（＝困ったこと）を言うことだなあ。隣は、前の常陸介でいらっしゃる。お姫様と申し上げる人も、そのような本など、見たり集めたりなさることは、当然のことにはない。今日のことさえ暮らしに困る身分の低い者の家で、本などに親しむことは、似つかわしくなくて、人に笑われることであるよ。そのような暇があるのならば、裁縫のほうに、心を入れて練習しなさいよ」と、とんでもないことだと思つて言つたので、父が、聞いて、「伊勢・大和の物語が欲しい」と言うとか。それは、（娘の）言うままに探しておやりなさい。娘が、もし男であるならば、今日この頃は、そのような国々を巡つて、すべての寺や神社を巡礼して回つて、たくさん金を使うだらう」と言つた。

（父は）伊勢・大和の名所が書いてある本と思つたのであろうか、たいそくおもしろいことである。

古文編2 『蜻蛉日記』

解 答

- 問1 a 口 b ハ c イ
問2 ニ
問3 ロ
問4 ニ
問5 イ
問6 ① かたはらいたし
② 心づきなさ
③ さすがに

一日のようなことがあつたら困る。

- 問7 I 藤原道綱の母（別解）藤原倫寧の女
II イ

問1 〈各2点〉

◇別解なし。

問2 〈4点〉

◇別解なし。

問3 〈4点〉

（30点）

- ◇「もこそ…已然形」が不安・懸念を表すものとして、「…たら困る」「…たら大変だ」と訳されていたら4点。この部分ができるいなければ、0点。
- ◇文末に句点を欠くもの、1点減点。

- 問4 〈2点〉

◇別解なし。

漢文編目次

〈出典〉

〔〕は解説冊子の頁

第1回 客有為齊王画者。

『韓非子』

〔54〕

第2回 劉遵祖少為殷中軍所知。

『世說新語』

〔56〕

第3回 楚恭王多寵子、

『說苑』

〔58〕

第4回 鄒忌窺鏡、謂其妻曰、

『戰國策』

〔61〕

第5回 人有好貨財者。

『五雜俎』

〔63〕

第6回 趙襄子謂仲尼曰、

『說苑』

〔66〕

第7回 月夜憶舍弟 杜甫

『唐詩三百首』

〔68〕

第1回

『韓非子』

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

客有為齊王画者。齊王問曰、「画孰最難者？」曰、「犬馬難。」王曰、「孰易者？」曰、「鬼魅最易。」夫犬馬人所知也。旦暮繫於前、不可類之、故難。鬼魅無形者不繫於前、故易之也。

(注) 1 鬼魅——いわゆる幽霊などの、靈的存在。

2 繫於前——人の目の前につながれている。

★★★
解説 20分・40点
54ページ

問1 二重傍線部 a 「為」・b 「易」・c 「夫」・d 「故」の読みをひらがなで記せ。現代仮名遣いでもよい。

問2 傍線部①・②について、次に示すそれぞれの読み方に従って、解答欄の白文に返り点をつけよ。送り仮名は不要。

- ① 齊王の為にゑが画く者有り。

- ② 前に繋がれず、

問3 傍線部(ア)「不レ可」をすべてひらがなで書き下せ。

問4 次の①～③の短文を、解答欄に従って、すべてひらがなで書き下せ。

- ① 未レ画。
- ② 将レ画。
- ③ 当レ画。

問5 波線部A「人所レ知也。」を、「所」の用法に注意して平易な現代語に訳せ。

問6 波線部B「之」・C「之」が指すものとして最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ選べ。

- ア 齊王 イ 鬼魅 ウ 犬馬 エ 人 オ 旦暮

漢文編1

『韓非子』

得点
点

問1

a

ニ

b

シ

問2

有

為

齊

王

画

者。

於

不

繫

於

前、

問3

（2）魚がく
（1）魚がか

問4

（1）魚がか

問5

（3）魚がく

問6

B

C

Sample

漢文編1 『韓非子』

解答

問1 aためニ bやすシ
cそレ dゆゑ(え)

問2 ①有_{下為}齊王_一画者_上。
②不_{レ繫}於前、

問3 べからず

問4 ①いまだ(ゑがか)ず。
②まさに(ゑがか)んとす。
③まさに(ゑがく)べし。

問5 人が(みな)知つてゐるものである。

問6 Bウ Cイ

間違いがあれば、2点。二つ間違いがあれば、0点。

①・再読文字「未」の最初に読む部分「いまだ」が読めている。

・再読文字「未」の再読部分「ず」が読めている。

②・再読文字「将」の最初に読む部分「まさに」が読めている。

・「んとす」(動詞に補う送り仮名「んと」+再読文字「将」の再読部分「す」)が読めている。

③・再読文字「当」の最初に読む部分「まさに」が読めている。

・再読文字「當」の再読部分「べし」が読めている。

問5 〈4点〉

4点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ間違いがあれば、2点。二つ間違いがあれば、0点。

・形式名詞の「所」を、「もの」「こと」のように正しく訳していること。

・その他の部分にも誤りがないこと。

問6 〈各2点〉

B・Cともに、正答のみを2点。その他は0点。

配点・採点基準

(40点)

問1 〈各2点〉

a～dとともに正しい読み方が出来ていれば、2点。それ以外は、0点。

問2 〈各4点〉

①・②ともに、返り点が正しくつけられていれば、4点。一箇所でも誤りがあれば、0点。

問3 〈4点〉

「べからず」という正しい読み方が出来ていれば、4点。その他の解答は、すべて0点。

問4 〈各4点〉

4点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ

出典

戦国時代の思想家韓非の著作、「韓非子」外傳説左上より採った。

『韓非子』は、法家の書として位置づけられ、故事・逸話の類を多く含むため、入試問題としてしばしば採り上げられている。

解説**問1 〈頻出語の読みを問う問題〉**

a 「為」は多品詞語だが、直後に名詞がある時には、まずは前置詞として「ために」と読んでみる。ここも、「為」ため「者王」ためと読めば意味が通る。

b 「易」やすシは「難」かたシとともに頻出する形容詞。「易」「難」とは読まないので注意。

c 「夫」そレは、これから大切なことを語る時に使われる語で、「そもそも」等と訳す。指示語ではない。

d 「故」ゆゑニは、「だから」の意味で現代語でも使われている語。

問2 〈返り点の問題〉

(a) 直前の一字へ返るなら「レ」、(b)二字以上前へ返るなら「一・二・」、(c)「一・二・」を挟んで返るなら「上(中)下」。この三つさえしっかりと覚えておけば、返り点の設問はほとんど得点できる。

①は、「王」→「為」が二字前に返るから「一・二」、「者」→「有」は直前の一字なので「レ」となる。

返り点は、一旦マスターしてしまえば確実な得点源となるもの。早い時期に自分のものにしてしまうことが望ましい。テキストやテストの問題文を白文で書き写し、書き下し文に従つて返り点をつける練習を繰り返すことが、最も効果的かつ早道である。

問3 〈書き下しの問題〉

「不^レ可^{べカラ}」は可能形で、「～できない、～してはならない」と訳す。文全体での書き下しが問われた時には、後の動詞（ここは「類」）を終止形（ラ変なら連体形）にして接続させる点にも注意する。

問4 〈書き下しの問題〉

三つとも再読文字である。

①「未^レ」は、「未だ^レ」（「まだ～ない」）。再読部分の「ず」に

接続させるために、動詞を未然形にして接続させる。

②「將^レ」は、「將に^レんとす」（「～しようとしている」）。送り仮名として必要な「ん」が意志・推量の助動詞なので、動詞を未然形にして接続させる。

③「當^レ」は、「當に^レべし」（「～しなくてはならない、きっと～するだろう」）。再読部分の「べし」に接続させるために、動詞を終止形（ラ変は連体形）にする。

問5 〈現代語訳の問題〉

漢文で出会う「所」は、英語の関係代名詞的な働きをする形式名詞であるから、これを「所」・「場所」と訳してはならない。現代語で「所有物」・「所蔵品」などというときの「所」がこれに相当するが、とりあえず「こと」「もの」と訳してみる。「所知」は、「知っているもの」である。

問6 〈指示語の問題〉

「之（これ）」の指示内容が問われたら、当然のことながらその前の部分から探すのが原則である。ただ、漢文は一文一文が短く簡潔で、現代文や英語のようなもつてまわつた表現は使わないから、直前の部分からさかのぼるように見ていくのがよいだろう。この場合には、「犬馬」と「鬼魅」とが対比的に述べられていることに気づけば、さらに選びやすいはずである。

読み方
 客^{カクセイオウ}齊^{セイ}王^ウの為^{ため}に画^ゑく者有^リ。齊^{セイ}王^ウ問^ひひて曰^はく、「画^ゑくこと孰^かれか
 最^も難^かき者^ぞ」と。曰^はく、「犬^{ケン}馬^バ難^かし」と。王^{オウ}曰^はく、「孰^かれか易^{やす}き者^ぞ」と。
 曰^はく、「鬼^キ魅^{モト}最^も易^{やす}し」と。夫^それ犬^{ケン}馬^バは人の知^しる所^{ところ}なり。旦^{タシボ}暮^モに前に繁^{つな}
 がる、之^{これ}に類^{ルイ}すべからず、故^{ゆゑ}に難^かし。鬼^キ魅^{モト}は形無^{カタナシ}き者^{もの}にして、前に繁^{つな}
 れず、故^{ゆゑ}に之^{これ}を易^{やす}しとするなり。

通釈

食客の中に齊王のために絵をかく者があつた。齊王が「絵をかくには何が最も難しかね」と問うと、「犬や馬が難しうございります」と答えた。王がさらに「何が簡単かね」と問うと、「幽霊や化け物が最も簡単です」と答えた。そもそも犬や馬は誰でも知つてゐるもので、一日中人の目の前につながれていながら、これに似せて（誰もが納得するよう）描くのは難しい。ところが幽霊や化け物は一定の形があるものではなく、目の前につながれていないから、描くのが簡単なのである。

漢文編2 『世説新語』

解
答

- 問1 a わかクシテ b すなは（わ）チ
c ともニ d つひ（い）ニ
e かつテ f ゆゑ（え）ニ

問2 為殷中軍所レ知

問3 いんちゅうぐんにしらる

問4 あへ（え）てまは（わ）ず

問5 ① 殷中軍に認められる。

ア 舞おうとしない。

問6 期待に反して失望させた点。（13字）

配点・採点基準

（40点）

問1（各2点）

a～fともに正しい読み方が出来ていれば、2点。それ以外は、0点。

問2（6点）

返り点が、解答のように正しくつけられていれば、6点。一箇所でも誤りがあれば、0点。

問3（4点）

4点満点として、次の要素が満たされていなければ、各マイナス2点。一つ

間違いがあれば、2点。二つ間違いがあれば、0点。

・「見」所」を、「しらる」と正しく読めている。

・その他の部分に誤りがない。

問4（4点）